

能登町文化財レスキュー^{ニュース}-News

第6号 発行日：令和6年6月1日 編集・発行：能登町教育委員会事務局文化財係

「文化財レスキュー」とは??

地震などで被災した家屋などから、古文書や美術工芸品などの歴史・文化的な資料を救出し、安全な場所に一時保管するものです。能登町では元旦の震災を受け、国の機関である文化財防災センターや、民間団体と協力して救出作業にあたっています。救出後には、資料を町で一時的に仮保管し（保管期間を限定します）、今後の取り扱いについて所有者と協議します。

文化財レスキュー活動報告



像のホコリの除去作業



仏画の状態を確認している様子

【5月16日 宮犬の弥勒院】

弥勒院は震災により、本堂などに被害を受け、雨漏りが発生するなどしています。この日は、文化財防災センターの職員ら10人が参加し、仏像や掛け軸などを被災した建物から救出し、安全な場所に保管する文化財レスキューが行われました。

本堂では、救出対象となる位牌や仏像のホコリを丁寧に払ったあと、写真をとり、リストに書き込んだあと、^{うすようし}薄葉紙と呼ばれる文化財を取り扱うための紙で梱包していきました。

また、仏などが描かれた掛け軸は、中を開いて状態を確認しながら写真を撮り、薄葉紙などで梱包していきました。

このあと、段ボールにまとめて収納するなどの梱包作業が終わったものから車に積み込み、町内の保管施設へ運ばれていきました。



梱包された仏像類



車へ積み込む作業

文化財レスキューで新しい発見も

文化財レスキューには、多くの専門家が関わるため、新知見を得られることがあります。

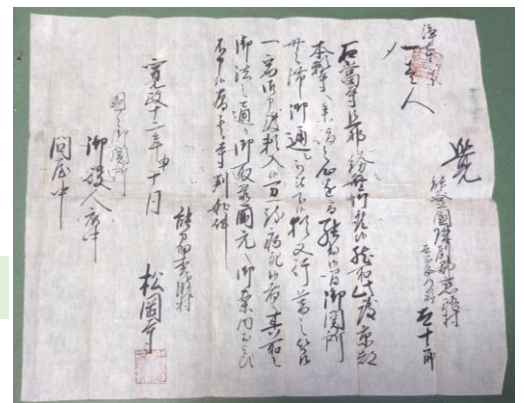
専門家によると、弥勒院の本尊が安置されていた厨子について、取り付けられた金具の細工が江戸初期～中期の制作と考えられるそうです。また、京都で修行した金沢の職人の作ではないかとの見解でした。

当院には、貞享5年（1688）に作られた初代宮崎寒雉の梵鐘があります。寒雉は中居金鋳物師の出身。父宮崎吉綱は、前田利家の命により金沢へ移住しました。寒雉は藩の御用釜師として、梵鐘や茶釜を数多く制作しています。この梵鐘を作らせた当時の住職は、弥勒院6世の良雄法印で、後に木食上人と尊敬された傑出した人物でした。

厨子の作製が同じような時期であるため、お寺の建物や仏具などを貞享年間ごろに、良雄法印と一緒に整えたのかもしれない。



本尊が安置されていた厨子と金具



往来手形と包み紙・板

江戸時代の旅事情

江戸時代は手軽に旅に行くことができませんでしたが、寺院や神社への参拝については、誰でも行くことが認められていました。旅行に行く際には、自分の檀家寺に往来手形の発行を求めました。往来手形は、自分の身元を証明するもので、右の史料は寛政12年（1800）珠洲郡恋路村の太十郎が松波村の松岡寺に依頼して発行してもらったものです。太十郎は京都の本願寺へ参拝するので関所を滞りなく通してほしいこと、夜には宿を提供してほしいこと、もし病気で死んだ場合はその土地の作法で埋葬し、故郷へは知らせなくてもよいことが記されています。

この資料は、太十郎の子孫である杉畠家の仏壇の中から出てきました。薄い板2枚で挟み込んで、「寺判」と書かれた紙に包まれていました。板には上下に切り込みがあるので、紐で固定していたのかもしれない。旅の際に汚れたりしないよう、こうした工夫をして持ち運んだのでしょうか。

本紙は町 HP からも見ることができます

https://www.town.noto.lg.jp/www/info/detail.jsp?common_id=20872

